即興劇と脚本劇における即興性
Improvisation in Improvisational Theater and Script-based Theater

安藤　花恵
Hanae Ando

西南学院大学
Seinan Gakuin University
h-ando@seinan-gu.ac.jp

Abstract

In improvisational theater, actors have to improvise without any script, so they need abilities to be sensitive to co-actors' acting, accept them, and flexibly and adequately respond to them. Such abilities enable audience to get excited. Similarities of abilities in improvisational theater and those of script-based theater and our daily life are discussed.

Keywords — improvisation, theater, acting

1. 即興劇

今回 Organized Session「前衛表現の理論・実装・認知」で発表するにあたり，『即興劇』という演劇形式を「前衛」として提案したい。

現在日本で演劇として上演されているものは，ほとんどが脚本に基づいた劇である（以後，『即興劇』に対応させて『脚本劇』と呼ぶ）。出演する俳優は，脚本によってあらかじめ決められた通りの言葉（セリフ）を話し，決められたストーリーをなぞる。一方『即興劇』には，脚本は存在しない。簡単なテーマやシチュエーションなどのお題が用意されていることはあるが，具体的なセリフも，ストーリーさえも決まっていない。出演する俳優は，同じ舞台に立つ共演者の演技に呼応してその場で自らの演技を紡ぎ出し，本人たちも今後どのようになっていくのかわからないストーリーを共に創造してゆくのである。

2. 脚本劇と即興劇

安藤（2015）は，演劇経験の長い俳優にインタビューをおこない，経験を積むにつれて変化したことは何かを尋ねた。その結果，多くの俳優が，経験を積むにつれて自分の演技を前もって考えておいたり，固定したりしなくなったと答えた。その代わりに，共演者とのやりとりの中で演技を作っていくようになったと答えたのである[1]。

土屋（2010）によると，「行動（アクション）」とは，「ある人間がある条件の下で、ある目的を持って、ある対象に働き掛けること」であり，演劇とは，ある登場人物のアクションに対し，それを「受け止め」た上で，また別の登場人物が「行動（リアクション）」を起こす…ということの繰り返しである。しかし，脚本演劇においてはセリフがあらかじめ決まっているため，この演技において必要不可欠な，相手と向き合い，相手を受け止めることが難しくなるという[2]。安藤（2015）において語られたように，初心者俳優が自分のセリフを「このようなタイミングで，このような口調で言おう」，「その時の表情はこのようにして，身体はこのように動かそう」と前もって決めて固定しているとしたら，それは相手役のアクションをまったく受け止めていないものとなる。理想的な演技が図 1 のように相手のアクションを受けて，それに呼応したリアクションを返していくものであるとすれば，初心者の演技は図 2 のように，つながらない個々のアクションが羅列されていくだけのものと言えるだろう。

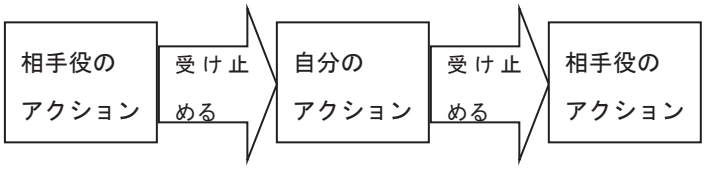

図 1. 理想的な演技のやりとり

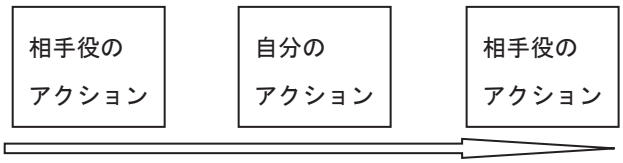

図 2. 初心者俳優の演技のやりとり

土屋 (2010) は，初心者俳優が相手の演技に「向き合い」，「受け止める」ことができるようになるための訓練として，『即興劇』が有効であるとしている。実際に昔から，俳優のための訓練の一つとして，即興劇は広く使われてきた。即興劇においては，自分がどんな表情をし，何と言い，どんな演技をするかは，相手役の演技を見てみないと決められない。相手役の演技が提示されてから，それに呼応した自分の演技を柔軟に創り上げなければならないのである。

また，相手役の演技が提示されたら，それを活かした反応を即座に返さなければならない。いわゆる“大喜利”のように，「うまいことを言ってやろう」などと頭で考えていたら，即座に反応することはできず，自然な演技とはならないだろう。実際に，絹川（2002）の即興劇の指南書の中には「頭で考えるのではなく，直感や想像力など感じることを大切にする」という趣旨の言葉が何度も出てくる[3]。即興劇の経験を積めば，相手の演技をそのまま受け止める包容力，そこから相手役の意図や感情，相手の提案するストーリーや設定などを敏感に感じ取れる感性，それに応じた反応が即座にできる柔軟性や協調性などが身につくと考えられる。

即興劇は脚本劇を演じる俳優のための訓練にのみ使われているのではなく，近年では，観客に見せるための上演も増えてきている。観客はもちろん即興劇であることを理解して観ているので，俳優が目の前でやりとりをしながらその場でストーリーを紡ぎ出していく様子に，ハラハラしたり，膝を打ったりと，脚本劇とは異なる楽しみがあるに違いない。即興劇を上演する際には，観客からテーマやキーワードを募ることもあり，脚本劇よりも観客の参与度も高い。キース・ジョンストンが考案した「シアタースポーツ ™」は，チームで即興劇を競って勝ち負けを決める，まさにスポーツのような上演形式であるが，そうでなくても，ストーリーがどこへ向かうのか，どのような結末になるのか誰もわからない演劇を，俳優たちがさまざまなパスを投げ合い，つなぎ合いながら創造していく様子を目撃するのは，スポーツ観戦のような手に汗握る興奮があるだろう。このような新しい観劇形式を提供している点，そして，それを支える俳優たちの高い創造性・柔軟性に，即興劇の「前衛」性を主張したい。

一方，脚本劇を演じる俳優たちの演技の中にも，自分の演技を固定するのではなく，毎回相手のアクションを受けて演技をするという即興性が含まれる。セリフやストーリーが固定されているにもかかわらず，その固定されたセリフを毎回即興的に演じることができるということも，俳優の卓越した能力であると言えるだろう。

3. 即興劇と「知」

私たちの日常生活は，常に即興劇をおこなっているようなものである。誰かと会話しているとき，話が今後どのように進むかは未定であり，お互いに，相手の話を聞いて，それに対して即興的に返事をすることで会話が進んでいく。即興劇を通じて俳優たちが身につけている能力は，私たちが日常生活の中で，他者の言葉・表情・しぐさからその感情や意図を読み取り，それを受け入れた上で即座にかみ合ったリアクションを取るために必要な力であると言える。そのため，即興劇を取り入れたワークショップや研修が，近年，教員や会社員，一般市民を対象としておこなわれることが増えている。即興劇を通じて身につけることのできる鋭敏な感覚や柔軟性・協調性といったものは，私たち人間に普遍的な「知」であると言える。

参考文献

[1] 安藤花恵（2015）長期経験者へのインタビュー調査による演劇俳優の熟達過程の考察 西南学院大学人間科学論集, **10**, 115-130.

[2] 土屋康範（2010）ドラマ教育における即興劇の効用に関する試論 文芸研究, **111**, 139-152.

[3] 絹川友梨（2002）インプロゲーム—身体表現の即興ワークショップ 晩成書房